Japanese Association for Religious Studies

イスラームの美と心
――アルハンブラ宮殿のアラビア銘刻句を通して――

鷲見朗子

〈論文要旨〉 最後のスペイン・イスラーム王朝であるナスル朝が建造したアルハンブラ宮殿の壁面や噴水には、クルアーン句、カシーダ（アラブ古典詩）句、神と統治者を崇める定式文句が美しいアラビア書体で刻まれている。本論はアルハンブラ銘刻句の図像的機能に注目し、それが表象するイスラームの美と精神を探求することを目的としたものである。イスラームの聖なる象徴である銘刻句の分析から、宮殿内の大使の間は荘厳なイスラームの七つの天を象徴し、獅子の中庭はクルアーンにあらわれる天国を表象していることが導き出された。ナスル朝スルタンはアルハンブラ宮殿を通してイスラームの信仰に基づく理想的な国家と政体を実現しようとしたのである。すなわち、銘刻句は建築物に意味と解釈を与えており、ナスル朝ムスリムの尊い宗教心と神への真摯な態度が建築芸術として表現されたものといえる。

〈キーワード〉 イスラーム建築芸術、アルハンブラ宮殿、アラビア銘刻句、クルアーン、カシーダ

タピストリのような壁面装飾に挿入された文字のリボンを発見するとき、建物自身がアラビア語を読む訪問者に解説を始める。建築家の魔法に類似した詩人の魔法は、建物自身が同時代の人々に告げようとしたこととその時代の精神を、多くの詩行に語らせる。(1)

Frederick Bargebuhr

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

はじめに

スペイン南部グラナダにあるアルハンブラ宮殿は、現存する中世イスラーム建築物の中でも最も美しく保存のよい建物の一つとして知られている。鍾乳石飾りによる天井ドーム、アラベスク文様の壁面、腰壁に張り詰められた彩釉タイルで飾られた宮殿は、イスラーム建築芸術の極致とされ、世界でも類を見ない傑作といわれている。「アルハンブラ」はアラビア語で「赤い城塞」を意味する「カルアト・アル＝ハムラーウ（qal'at al-ḥamrā'）」に由来した名前で、グラナダ東部のサービカと呼ばれる小高い山の上にある、城壁に囲まれた地域全体の呼称である。イベリア半島最後のイスラーム王朝、ナスル朝（一二三二―一四九二）が残したもので、城塞の建設はナスル朝を興したムハンマド一世（在位一二三二―一二七三）によって始められたが、王宮は第七代スルタン、ユースフ一世（在位一三三三―一三五四）とその子ムハンマド五世（在位一三五四―一三五九、一三六二―一三九一）の時代のものとされている。歴代スルタンの約三分の一が暗殺によって死をとげているほど政治的不安定が続いたナスル王朝は、十五世紀末、キリスト教軍のグラナダ征服によってその最期を迎え、アルハンブラもキリスト教徒の手におちた。しかし、王宮は決定的な破壊や改変を免れ、今もなおスペイン・イスラーム文明のモニュメントとしてその輝かしい姿をグラナダの地にとどめている。(2)

本論はアルハンブラ宮殿の建築装飾として壁面、噴水盤、柱などに刻まれたアラビア句を対象とし、それが表象するイスラームの美と心を探ることを目的とする。宮殿に彫り刻まれた句は①『クルアーン』からの引用句、②カシーダ（qaṣīdah　アラブ古典詩）句、(3)③神と統治者を崇める反復定式文句の三種類に分類される。本稿ではアルハ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ンブラに見られるような、建築物に文字を刻む行為に「銘刻」(inscription)という言葉を用いたいと考える。よって、「銘刻句」は刻まれた句を意味し、「銘刻聖句」は刻まれたクルアーン句、そして「銘刻詩句」は刻まれたカシーダ詩文を意味することとする。イスラーム建築において、銘刻、特にクルアーン句の銘刻は珍しいものではないが、アルハンブラに見られるような数々の詩句の銘刻は近代以前のイスラーム史においてはほとんど比類なきものである。[4] アルハンブラ銘刻句には、表現内容のモティーフとしてイスラームの聖典であるクルアーンとアラブ・イスラーム文学の根幹を形成してきたカシーダが、そして表現する形としてイスラームにとって神を表象するのに不可欠なアラビア書道が用いられている。一方、表現空間はイスラームの装飾技法を駆使したイスラーム建築文化の象徴ともいえるアルハンブラ宮殿である。このように宮殿の銘刻句はイスラームのエッセンスが凝縮されたものというだけでなく、宗教、文学、書の芸術、そして建築の文化が合い交わった独特かつ重要な事象であるといえよう。そこで、本稿ではまずイスラームにおける言葉と書の重要性を論じ、銘刻句の内容、建築物と句のはめ込まれた位置との関係をみながら、銘刻句の宗教的・芸術的機能に焦点をおいて銘刻句が体現するイスラームの美しさと精神を解き明かしていきたい。なお、クルアーン句以外の句のアラビア語和訳は筆者によるものである。

クルアーンはイスラームの聖典で、神の言葉そのものと考えられている。他方、カシーダは単一の韻律と脚韻をふむアラブ古典詩のことで、その起源はイスラーム以前のジャーヒリーヤ時代である西暦五世紀にさかのぼり、二十世紀の緒にその衰微をみせるまで、アラブ文学の主流をなしてきた。[5] 伝統あるカシーダ文学はムスリムのスペイン征服とともにアンダルシアにも伝わり、その地で著名な詩人を多く産出しただけでなく、修辞的技巧において新しい趣向を見せるなどの発展をとげた。[6]

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

一　イスラームにおける言葉の重要性

イスラームにおいては、神は言葉をもって現れた。神の言葉は預言者たちを介して啓示され、ムスリムにとっての最後の預言者ムハンマドによってそれが最も崇高な形をとったのが聖典クルアーンにおいてであった。西暦七世紀前半にアッラーの神の啓示はおこり、同世紀末にカリフ、ウスマーンの命によってクルアーン（文字どおりは「誦むこと」、「朗誦」という意味）として編纂された。クルアーンの内容は神の意思の直接表現すなわち神の言葉そのものとされており、このことからクルアーンは至聖の性質を備えているとみなされている。

啓示がおこったとき、神は人間に対して言葉ではたらきかけてきたため、ムスリムにとって神のあまねく存在を表す手だては、その言葉の姿を永遠化させることであった。これはキリスト教徒が神の存在をその息子、すなわち人間の姿によって認めようとするのに対照的であるといえる。言葉を重んじ、言葉の姿を永遠化しようとする意思は、イスラームの宗教芸術のなかにも息づき、神の言葉を書あるいは文字にすることがイスラームの芸術表現の基盤となった。[7] また、啓示はアラビア語で顕れたため、クルアーンに限らずアラビア文字での書は、イスラームの聖なる象徴であり、必要不可欠な行為であるとされている。[8] したがって、アラビア文字の書を用いる「銘刻」自身にすでに聖なる性質がそなわっているといえる。

二　アルハンブラ銘刻句

アルハンブラ宮殿には多数の銘刻句が見られるが、なかでもコマレス塔（写真1）のなかの「大使の間」（別称

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

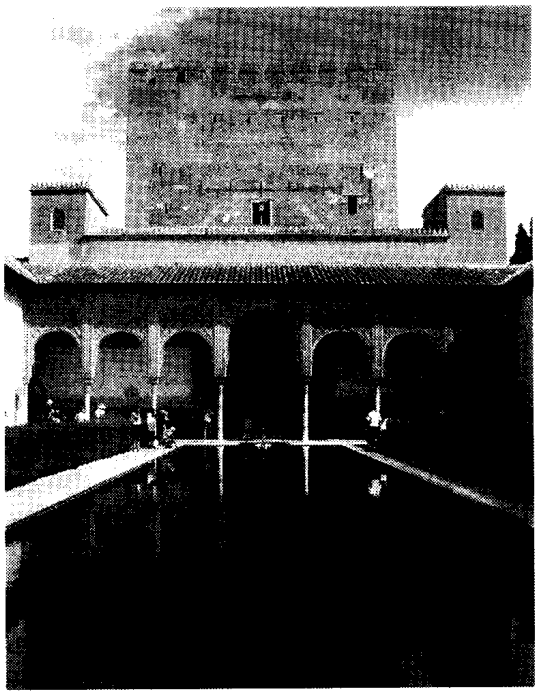

写真1　ミルトの中庭に面したコマレス塔

コマレスの間　Salón de Comares）（ユースフ一世時代）、「獅子の中庭」Patio de los Leones（ムハンマド五世時代）、「二姉妹の間」Sala de Dos Hermanas（ムハンマド五世時代）に刻まれたクルアーン句、カシーダ詩句、反復定式文句を調査していく。調査対象の選択理由として、その場所に宮殿の代表的なクルアーンとカシーダの銘刻句があることと、これら刻まれた句に図像的機能が備わっていることがあげられる。図像的機能とは建物の特別な意図を明らかにする機能、もしくは一見しただけではわからない関連付けを生じさせる機能のことをいい、句が図像的機能を有することは、オレッグ・グラバなどによる過去の研究で明らかになっている。[9] つまり、アルハンブラ銘刻句は建築装飾として宮殿の各部分にはめこまれたものであるが、そこにあるのは単なる装飾機能だけではない。アラビア文字を解する者には、銘刻句の内容が建築物に言及していること、あるいは建築物に何らかの繋がりをもっていることが理解されるのである。

大使の間はその南側にある「ミルトの中庭」とともに宮殿の公的空間を形成している。一方、ミルトの中庭の東側にある獅子の中庭とそれの北側に隣接する二姉妹の間は私的空間に位置する。銘刻句に用いられた書体はクーファ書体とナスフ・スルス書体の二種類である。クーファ書体はクルアーン句の書に用いられることが多く、アルハンブラでも通常クルアーン句はクーファ書体、詩句はナスフ・スルス書体で刻まれている。[10]

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

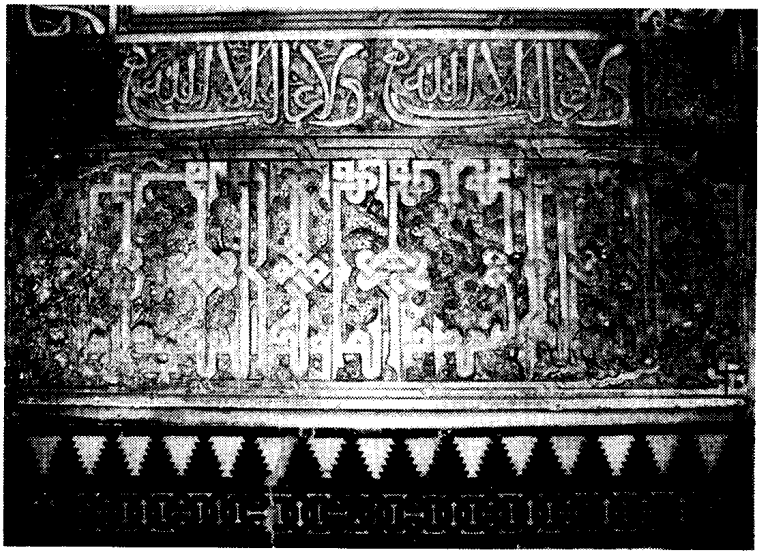

写真2　大使の間の銘刻句
上部がナスフ・スルス書体　中央がクーファ書体

1　大使の間―天の蒼穹

宮殿内の他の間に比較してより多数の句が彫り刻まれている大使の間の銘刻句（写真2）をまずみていくことにしたい。大使の間があるコマレス宮は主にユースフ一世とムハンマド五世の時代に建てられた。ミルトの中庭から「船の間」（ムハンマド五世時代）を通って至る大使の間（ユースフ一世時代）は、王の謁見室であった。アルハンブラ宮殿で最も高いコマレス塔内に位置する最大の部屋で、面積は一一メートル四方、高さは一八メートルに及ぶ。東、北、西の三方にそれぞれ三つずつ、九つのアルコーヴ（部屋の一部を凹状に入り込ませた小部屋）があり、各アルコーヴからは直接外が見渡せるようになっている。壮麗な天井は木製のドーム（丸天井あるいはクーポラ）で八〇一七もの嵌木細工で造られている。腰壁は色鮮やかな彩釉タイルで、その上の漆喰壁は幾何学文様と植物文様装飾でびっしりと埋め尽くされている。

銘刻句の内容は建築内各部の機能に適合するべく注意深く選択、あるいは創作され、同様に慎重に選ばれた位置に句は刻まれていると考えられる。大使の間の入り口にはメッカ啓示とされるクルアーン第一一三章「黎明」の冒頭が引用され、ユースフ一世が悪から逃れられるようにとの願いがこめられた散文が彫刻されている。

最高の誉れは主に。わたしはクルアーンの五句「言え、『お縋り申す、黎明の主に、その創り給える悪を逃れ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

て、深々と更わたる夜の闇の悪を逃れて。結び目に息吹きかける老婆らの悪を逃れて、妬み男の妬み心の悪を逃れて』」によって、ユースフへ害をもたらすすべての目からユースフを守るであろう。唯一神の主に誉れを。主に感謝。主は永遠。主こそ力なり。[11]

この句が示しているのは、神と神の力への賛辞とユースフ一世が神から加護を受けているというメッセージであろう。同時に、この広間の主がユースフ一世であることを伝えている。こうして君主の名前を入り口の壁面に刻むことで、これから進む大きな広間が彼に属していることを訪問者に告げているのである。また、この聖句引用によって、君主は悪から守られているが、それは神の加護によるものであるということが強調されている。このように適切なクルアーン句を適所に選んでいるといえよう。[12]

銘刻句は「わたしは……ユースフを守るであろう」と語っているが、「わたし」とはいったい誰なのであろうか。この句を刻んだであろう宰相詩人とも考えられるが、部下である宰相が君主を守ることは不自然であるので、ここでは間の入り口にことばを与えて語らせているとみるのがふさわしいと考えられる。すなわち、「わたし」とは間の入口で、そうすることによって、あたかも大使の間がユースフ一世を守っているような錯覚をおこさせる。このように建築物や事物に一人称で語らせる手法は、後述する宮殿内の他銘刻句の例にも見られるものである。

広間の内部には、建物の意味をより明確に表現する図像的銘刻がある。それは大使の間の天井クーポラのすぐ下の木製コーニスに刻まれているクルアーン第六七章「主権」の全三〇節だ。入り口の向かい側に位置し、ユースフ一世の玉座が据えられている北側壁面の右の角から章句は始まる。天井ドームの意味を理解するのに重要と思われる最初の五節を紹介しよう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ああなんと素晴らしいことか、（万有の）主権を掌握し給う御神。いかなることでもおできになるお方。死と生を創り出し、お前たちを試みて、誰が一番立派な振舞いするか（お調べ）になったのもあのお方。限りなく偉大で、なんでも気持ちよく赦して下さる御神。七つの天を、一段また一段とお創りになったのもあのお方。お情ぶかい御神の創造の御業（みわざ）、どこに欠けたところが見つかるものか。目をめぐらして詳しく観るがよい。どこかに割れ目でも見つかるか。さ、もっとよく見なおしてみるがよい、もう一度、さ、もう一度。視線は撃退され（目当のものが何一つ見つからず）疲れはてて（広い天をくまなく探し歩いたので）元へ戻って来るだけのこと。また我ら、最下層の天（七つの天のうち一番地球に近い層）には綺麗な燈火（星を指す）をたくさんつけて置いた。これがまたシャイターン（サタン）どもを懲しめる礫にもなる（流星は天使が悪魔にぶつける石礫である）。彼ら（サタンたち）には火あぶりの刑が用意してある。[13]

既にいくつかの研究が指摘しているが、この聖句が天井ドーム直下に刻まれていることから、句に言及されている神の創造した七つの天を天井ドームが表現しているといえる。[14] 具体的にいうと、丸天井の木製透かし細工装飾にある六つの星の層とその中央の小さなクーポラを合わせた七つの層が七つの天を表象していることになる。よって、このクルアーン句は天井が視覚的に示すデザインの意味と解釈を見る者に与えているといえる。

この極めて高いところに刻まれた聖句と呼応しているかのように、間の下部にはカシーダ句が銘刻されている。上述した九つのアルコーヴのうち、北側壁面の三アルコーヴの中央のものの内部に、さあ読んでくださいといわんばかりに目線の高さにカシーダ詩句が詠み刻まれている。ガルシア・ゴメスによるとこの詩は作者不詳ということだが、フェルナンデス＝プエルタスはこの詩はおそらくユースフ一世の宰相詩人であったイブン・アル＝ハティーブ[15]

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

（一三一三―一三七四）の作品であろうと述べている。[16]

あなたはわたしから朝夕
恵みと繁栄と幸せと友情の挨拶をおくられた。
これは高いドームでわたしたち［アルコーヴ］はその娘、
わたしはそれらのわたしと同種のもののなかで卓越性と栄光を得ている。
わたしは身体の真ん中にある心臓である、
というのはそこには魂と精神の力が宿っているから。
わたしの仲間［アルコーヴ］は天の一二宮のしるしであり、
かれらにではなくわたしにのみ高貴な太陽がある。
わが君主、神の寵児、ユースフは
栄光とくもりなき寵愛の衣でわたしを飾った。
君主はわたしを統治の玉座に選んだのだ、
かれの卓越が光の主と神聖な玉座によって支えられんことを。[17]

これもまた一人称を用いてアルコーヴ自身に語らせているこの詩は、いくつかの重要なことを示唆している。まず、中央のアルコーヴがユースフ一世の玉座として用いられ、全てのアルコーヴのなかで中心的役割を果たすということ。そして、七つの天を創造した神が、中央のアルコーヴ、すなわち、そこに玉座のあるユースフ一世を選んだということである。次に、アルコーヴは天の一二宮であると述べることで、間の宇宙的意味を強めている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

また、アルコーヴはドームの娘であると主張することで、天井ドームとの関係を表し、天井を表す上部のクルアーン句とも呼応していることを示唆する。カシーダ詩句は、天井とそれに意味を与える聖句の両方を意識して創られた可能性が高く、このアルコーヴのために特別に創作されたものであろう。クルアーン句によって上部は天空の世界を表し、下部は下界となりその長がユースフ一世であることから、ユースフ一世は上部と下部を繋ぐ者であることが示される。したがって、彼は下部の一番高いところにおり、神にイスラームの民を守ることを託された者といえよう。[18] ユースフ一世は玉座で荘厳な謁見を行い、さまざまな事例に判断を下したことであろう。

クルアーン句に使用されているクーファ書体は、その幾何学文様化と加えられた装飾のため、通常のアラビア語教育を受けた者でも判読が困難であるとされている。[19] クルアーン句は別段判読されなくともよいという意図があるのかもしれない。つまり、重要なことは読まれることよりも聖句がそこに在るということであろう。それに対してカシーダ句に用いられているナスフ・スルス書体は筆写体で、曲線が描く綺麗なカーブに特徴があり、少なくともアラビア語の読み書きができる者には、容易に読み取ることが可能である。判読される、されないは別にしても、角張ったクーファ書体、丸みを帯びたナスフ・スルス書体は両書体ともみごとな壁面装飾の役割を果たしている。

クルアーン句は極めて高い位置に書かれていて、訪問者にそれを読み理解することを期待するよりは、むしろドーム天井あるいは建物そのものに意味を与える機能が強いと思われる。これに比して、カシーダ詩句は目線の高さに刻まれ、訪問者に読まれることが期待される。すなわち、カシーダ詩句は建築空間と建築が意図するものを繋ぎ、そのことを観る者に伝える役割をしている。訪問者はカシーダ句を読むことで、いま目の前にあるアルコーヴ（建築空間）とそのアルコーヴの存在の意図を理解するのである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

大使の間にはモザイク腰板の上やコーニスの上部などさまざまなところに、次のような定式文句が反復して刻まれている。ナスフ・スルス書体の「勝者は神以外にあらず（la ghālib illa allāh）」という標語（写真3）はアルハンブラ宮殿のいたるところに見られ、一番多く銘刻されている定式文句である。

神よ！あなたへの賛美は永遠である。あなたへの感謝は永遠である。
イスラームの恩恵をくださる神に賛美。
勝者は神以外にあらず。
我らが君主ムスリムの司令官、アブー・アル＝ハッジャージュ［ユースフ一世］に
見事な勝利とその帝国の強固なることに、神が助けたまわらんことを。[20]

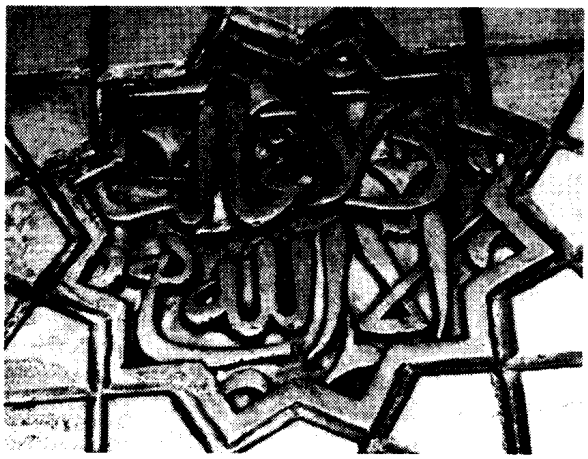

写真3　銘刻句「勝者は神以外にあらず」

神あるいは為政者を崇める句が何度も繰り返し彫刻されている。これによって神と為政者の崇高さを際立たせる強調的な機能をもたせているといえよう。神への信仰と、君主ユースフが神によって誉れと勝利を授けられるようにとの願いが、まるでアルコーヴが語るカシーダ詩句の内容を強調するかのように、壁に刻まれている。定式文句は単に形式的に反復する文句として、もしくは空間を埋めるための装飾の一部として刻まれたものとして簡単に片づけられることが少なくない。[21] しかし、筆者には定式文句はその美しい装飾効果とともに聖なる性質を強調する任務が与えられていると感じられる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

2　獅子宮―地上の楽園

次に獅子宮の区画をみてみよう。中庭（パティオ）（二八・五×一五・七メートル）を中心とする獅子宮はムハンマド五世の治下に建設された。パティオを囲む一二八本の細い白大理石の列柱が、幻想的な雰囲気をかもしだしている（写真4）。中庭中央に一二頭の獅子に支えられた一二角形の水盤と噴水があり、東西にはパヴィリオンが配されている。

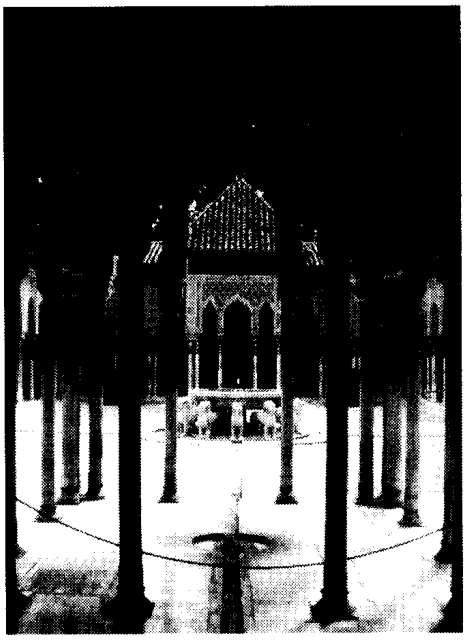

写真4　獅子の中庭

この宮殿の代表的な銘刻句はパティオの北側にある二姉妹の間のカシーダ句と獅子の噴水盤[22]の外壁に彫り刻まれたカシーダ詩句である。[23] どちらのカシーダ詩句も前述の宮廷詩人イブン・ハティーブの弟子であった宰相詩人イブン・ザムラク[24]（一三三三―一三九三？）によるもので、ムハンマド五世へ捧げた一四六句からなるカシーダト・アル＝マドフ（qaṣīdat al-madḥ）（頌詩）から抜粋されたものである。[25] 私的住居として使用されていた獅子宮に聖句は刻まれていないが、神を崇める定式文句は中庭の柱や建物の壁面に刻まれている。ここでは、中庭も含めた獅子宮内の複数の箇所に言及している二姉妹の間のカシーダ銘刻句と噴水銘刻詩句を中心にみていく。

二姉妹の間は獅子の中庭の北側の一画にある王の居室で、部屋の左右にはそれぞれ長方形の寝間が付置され、間の奥は「ダラクサの張り出し窓の間」Mirador de la Daraxa へ通じている。二姉妹の間の名前は、部屋の中央にある小さな噴水の両側にはめ込まれた二枚の大きな大理石板に由来するといわれている。噴水のはるか上には鍾乳石（スタラクライト）でできたムカルナスとよばれる天井ヴォールト（クーポラ）（写真7　後述）があり、五千に

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

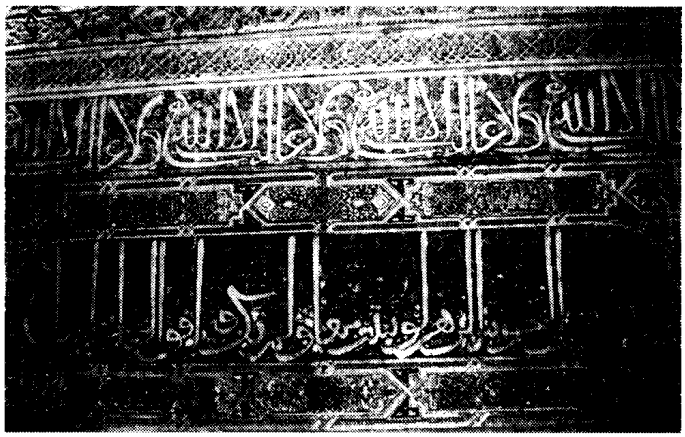

写真5　二姉妹の間　銘刻詩句　第八句

写真6　二姉妹の間　銘刻詩句　第七句

及ぶプリズムが織り成す光景は美の極限に達する。ヴォールトは八角形の塔になっており、各辺に二つの窓、合計一六の天窓がしつらえてあり、光の変化につれてさまざまに表情を変える。

室内壁面下部には種々の色が織り交ぜられた無数のリボン状の幾何学文様タイル装飾があり、その上に詩句が銘記されている。壁の上部には「勝者は神以外にあらず」という神を崇める定式文句が繰り返し刻銘されている。カルトゥーシュとよばれる楕円形（写真5）と円の花枠（写真6）に縁取られたアラビア文字は、かたどられ彫り刻まれた多彩色の漆喰で、ターコイズ色の螺旋形あるいは自由な花模様の背景に金銀色で織り込まれた詩のテクストである。この詩句もクルアーン句同様素晴らしい装飾的効果を持つ。二姉妹の間の壁面に刻まれた二四句は二姉妹の間のみならず、獅子の中庭の柱廊と噴水、塔、庭をシンボルとアレゴリーに満ちた比喩で表現している。

わたしは毎朝美しさで飾られ、あらわれる庭園である、

わたしの美しさを熟考なさい、あなたは装飾の注釈から何かを得るであろう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

わたしは、主人であるイマーム・ムハンマドさまゆえに、
　これから来たる者、これまでいた者すべての者よりもすぐれている。
かれの建物はなんと美しいことか、
　幸運の命により、他のすべての建物をも凌駕して。
そこは観る者にいかほどあまたの悦ばしい慰めをもたらすことか、
　静なる魂でさえ熱情をかきたてられる。
すばる星団の手は神がかれら［ムハンマド五世の息子たち］を
　加護してくださることを一晩中祈り、
　朝にはとてもやさしいそよ風がかれらのために舞い上がるであろう。
ここには美しいクーポラがあり、
　それはほかのすべての美しいクーポラを消し去り見えなくしてしまう。
ふたご座がそれにあいさつの手をさしのべ、
　天空の満月は秘密をささやくために近づくであろう。
輝く星たちは天の蒼穹を横断するよりは、
　このクーポラに棲みつきたいと願い乞う。
もし星たちが中庭に現れたならば、
　かれらは君主が喜ぶお仕えをするために侍女らと競い合うであろう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

クーポラは高さにおいて星たちを超え、
　かれらの高さの限界をまだ超え行く。
星たちがその勤めを遂行するために昇ったのはわが主人の前、
　一番高い者に仕える者はそのことで高貴を勝ち取る。
中庭は美にまさる柱廊を持っている、
　それでもって宮殿は天の蒼穹と美を張り合う。
いかに多くのみごとなカーテンであなたは宮殿を飾ったことか、
　その色彩に富んだ刺繍はイエメンの金襴を忘れさせるほどだ。
その中庭にはいかに多くのアーチが上がっていることか、
　そのアーチは一晩中光によって彩られた柱に支えられている。
アーチを、かすかに輝いた夜明けの柱に影をおとす、
　軌道をまわる天体の球であるとあなたが思うまで。
柱はことごとくの稀有な不思議を生んだので、
　柱についてのことわざは遠く広く飛んでいく。
宮殿には磨かれた大理石があり、その輝く光彩は
　闇にかくれていたものをあらわにした。
柱が太陽の光線によって照らされたとき、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

あなたは柱が巨大であるにもかかわらず真珠であると思うであろう。
われらは宮殿の望楼よりも高いものを、その眺めよりも明瞭なものを、
その集会の間よりも広いものを目にしたことがない。
われらはさわやかさにおいてこれほど魅力的で、
あらゆる方向へこれほどかぐわしく、
これほど木の実をとるのが楽しい庭園を見たことがない。
そこでの二つの貨幣の交換は、それらに似たもののために、
美が支払うべきものとして、裁判官が美に許したもの。
もし庭園が輝く朝の太陽のなかで
そよ風の手のひらを光のディルハムで満たすならば、
手のひらはそれを受け入れるであろう。(26)

庭園の囲いは、その枝のまわりで、
庭園に光彩を添えている陽光のディーナールによって満たされることであろう。
ふたご座がクーポラにあいさつの手をさしのべ、
天空の満月は秘密をささやくために近づくであろう。(27)

この二四句の銘刻句のうち第三句から第五句までと第七句から第二四句までの二一句は、イブン・ザムラクが作詩した一四六句からなるカシーダに含まれている。(28) このカシーダはアルハンブラ宮殿の描写が主なモティーフとな

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

るムハンマド五世への頌詩である。この二一句は、カシーダ内の句の順番とは関係なく刻まれていることから、二姉妹の間の壁面に刻むために特別に選ばれたものであろう。つまり、おそらく最初に一四六句のカシーダがあり、それの宮殿描写の部分からもっとも適切な句が、時には語句も微妙に変えられて、句の順序とともに考慮されて選択されたと考えられる。(29)

一四六句カシーダの方には含まれていない第一句、第二句、第六句のうち、第六句は明確ではないが、第一句、第二句は、この詩を二姉妹の間にふさわしくするために、冒頭句として既作の詩行から選ばれた、あるいは特別に創作された可能性が高い。というのは、まず、両句とも一人称を用い、第一句では「わたしは庭園である」と明言している。つまり、庭園が詩句の語り手となってアルハンブラ宮殿のほかの部分の素晴らしさを語っている。そして、「装飾の注釈から何かを得るであろう」という言葉では、この詩行がこの句以降、獅子宮の各部分を描写していることを考慮すると、「装飾の注釈」とはほかならぬ銘刻句をさすと考えられる。建物の注釈となるために刻まれたということと、その心構えをもって刻まれた句を読んでいきたまえというイブン・ザムラクが建物に託したであろう意図がこの部分から伝わる。第一句は間に入ってすぐ右手の壁に刻まれ、アラビア語は右から左へ書かれるので、そのまま間の壁面を左手の方向へ一周しながら読んでいく。第二句には、わたしの「主人であるイマーム・ムハンマド」という言葉から、この庭園の、ひいてはこの建物空間の素晴らしさはわたしの主人であるムハンマド五世のおかげであると主張していることが読みとれる。続いて第三句の「かれの建物」の「かれ」は、ムハンマド五世を意味することから、この華麗な建物はスルタンが建てたことを想起させてくれる。これらのことから、銘刻句は壁面に刻まれ建物の注釈となるべく、一句一句に読む者に対する呼びかけがこめられており、そこには当時の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

人々の建築の芸術と詩の芸術の二つの芸術に対する高い感受性と関心が感じとれる。

詩行は二姉妹の間とその周囲にある庭と柱廊がどれほど壮麗なものであるかを詠っているだけでなく、誰もが住みたいと願うイスラームの天国のような理想的空間を創りだしていると筆者は考える。[30] 外観的で物質的な美点を喚起することで視覚的な建物の姿を呈する一方、内面的、精神的な性質を表現することで慰めと安楽のイメージを強調している。第六句では二姉妹の間にある見事な鍾乳石のクーポラ（半球状天井）（写真7）に具体的に言及している。詩句はクーポラを天の蒼穹と比較し、星たちが客人としてあるいは従者としてこの快適な宮殿にやってくることから、宮殿が天の蒼穹よりも優れていると詠う。詩のテクストによると、中庭の柱間にかかるアーチは夜の光に照らされ、あたかもそれ自身が回転している天球かと見まがうほど美しいとされている。[31] また、これほどさわやかで魅力的な楽園はないと称え、庭園が太陽の光を浴びて光輝くイメージが大きく描き出される。このように詩行は、ムハンマド五世の造り上げた空間である獅子宮が、クルアーンにうたわれるイスラームの楽園を表象していることを示唆して

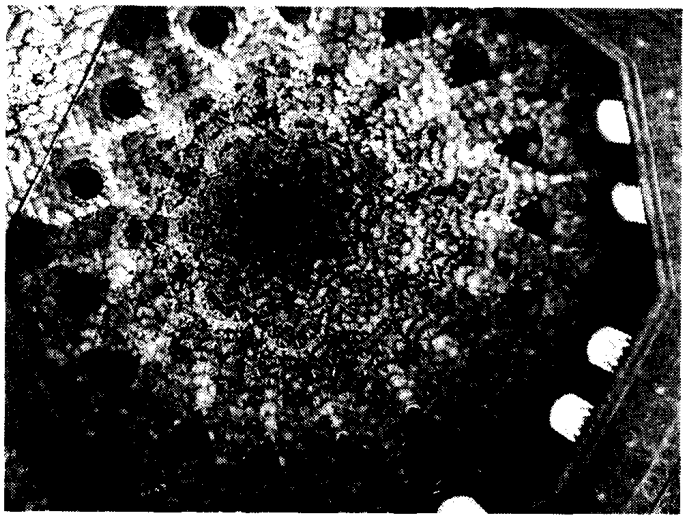

写真7　二姉妹の間　鍾乳石天井（クーポラ）

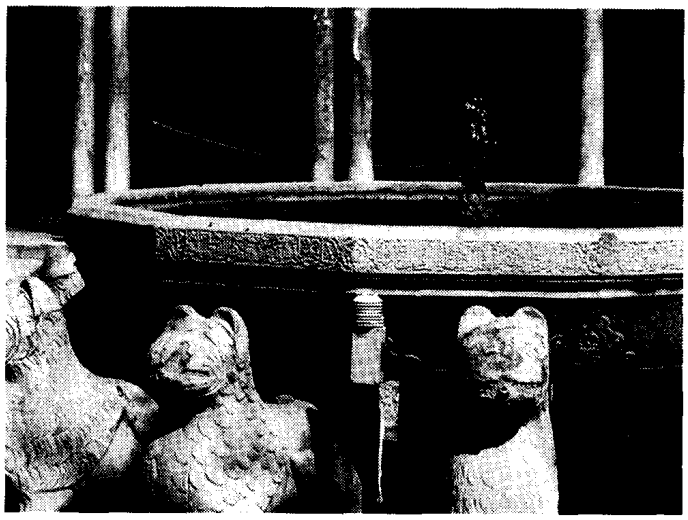

写真8　獅子の噴水盤外側銘刻句

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

いる。同時に、獅子宮がクルアーンの天国に優るとも劣らない地上の楽園であることを暗示しているといえる。

一二角形噴水盤の外側に刻まれている一二詩句（写真8）は噴水に解釈を与える図像的機能を示しながら、最後の二句で噴水を設営した統治者が神に加護を受けているイスラームの正統なスルタンであることを強調している。[32]以下にあげたのは一二句のなかで噴水に直接言及している第四、五句とスルタンについて述べている第一一、一二句である。

銀は宝石をぬって流れしものを溶き、
　美と純白において水のごとし。
その液体は、眼に固体のようにも映り、
　どちらが流れているのか私には見極めることができぬ。
近しき血縁に基づいたアンサールの後継者よ、
　その威厳の継承権は、山をも軽く見せる。
神の平和が、そして永遠の安寧が、スルタンの頭上にあらんことを、
　敵は常に打ち負かされ、祝祭の日が幾度も繰り返されよう。[33]

第四、五句では噴水から噴き出る水を言い表し、水があたかも凍ったように、美しい純白の銀および固体にみたてられている。水はアルハンブラ宮殿のなかで浴場や噴水にふんだんに用いられ、潤いを与える欠かせない要素である。また、水への言及はクルアーンに描かれる天国の河川や泉のイメージを喚起させる。[34]第一一句のアンサール（メディナでの預言者ムハンマドの支持者）の後継者とはムハンマド五世のことをさし、続く第一二句とあわせて

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

スルタンの正統な血統とスルタンへの神の祝福が表わされている。神はいうまでもなくイスラームの神である。このように獅子宮を建てたムハンマド五世には、この宮殿にクルアーンに詠われるかぐわしい楽園を表象させる意図だけでなく、宮殿の主である自らがイスラームの正当な継承権を有する者であることを誇示する意図があったと考えられる。

むすび

銘刻句のテクストを刻まれた位置と照らし合わせて考察した結果、宮殿内の大使の間は荘厳な七つのイスラームの天を表象し、また獅子宮はかぐわしい天国を表象していることが導きだされた。大使の間はユースフ一世が威厳ある公式謁見を行った場所である。神が統括する七つのイスラーム的天を表す丸天井の下で、神に選ばれたユースフ一世が裁きを行ったと考えられる。したがって、銘刻句は神が彼の頭上に存在し、祝福を授け、彼の裁きを照らしてくれたことを暗示する。他方、私的空間である獅子宮は神に加護されたスルタンが造営したもので、その美に優る、柱廊や星団も棲みつきたくなるような美しいクーポラ、そして魅惑的な庭園は見るものに悦びと慰めを与えてくれる。大使の間では正当な国家統治に欠かせない公正な判断が下されたことが示唆され、獅子宮では理想的で、繁栄にみちたナスル王国の姿が映し出されている。宮殿に託されたそのイメージは、神に正しく導かれた永久完全のイスラーム政体と国家を表象しているのではないかと考える。

すなわち、統治者はアルハンブラ宮殿を通して理想的で完全なイスラームの政体の体現をめざしたのであろう。ナスル朝の政治的混沌を生き抜いたスルタンは、過酷な現実が目の前にあったからこそ、クルアーンの楽園のイメ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ージをアルハンブラに託し、建物に完全無欠のイスラーム王国を表象させようとしたと考えられる。そして、その思いの底流にあるのはイスラームへの篤い信仰心である。クルアーン第六五章「離縁」（第一―一二節）の次の箇所は、アルハンブラ宮殿を建造したユースフ一世とムハンマド五世の意思を反映しているのではないだろうか。

誰でもアッラーを信じ、義しい行いにはげみさえすれば、必ず潺々と河川流れる楽園に入れて、そこに常とわまでも住まわせて下さろう。…アッラーこそは七つの天を創り、さらにまた同数の地を創り給うたお方。[35]

アッラーの神への信仰を深めれば、誰でもこのような楽園に住むことができる。このような楽園とは神の創造した天の蒼穹と楽園を体現するアルハンブラ宮殿のことである。アラビア銘刻句はそんなナスル朝ムスリムの尊い宗教心と神への真摯な態度が建築芸術に表現されたものといえる。また、銘刻句は装飾機能をもつ建築物の一部でありながら、建築物自身の注釈となるという、非常に洗練された形で言葉の芸術と建築の芸術を一体化させたものである。よって、「美」を表す建築装飾機能と「心」を表す言葉（句）の機能が密接に絡み合い相互に影響しあうアルハンブラ銘刻句は、イスラームの美と心を一体化させて表現したものであるといえる。クルアーン句は神の偉大さなどの絶対的真理やイスラームに通じる普遍的真理を表現するのに用いられ、カシーダ詩句はそれら真理とナスル朝（の統治者たち）あるいはアルハンブラ宮殿とをつなぐために用いられた。つまり、統治者はイスラーム信仰に基づいた地上の楽園をアルハンブラという建築物によって体現しようとしたということを銘刻句が語っているのである。また、カシーダ句は建築物に一人称で語らせることによって、建築物に言葉を与え、同時に意味を与える。定式文句は神への賛美と統治者への神の加護を繰り返し詠うことで、イスラームの「真実」を目に見える形にしたものであった。そして、これらアルハンブラ宮殿に託された思いをより明確な形で表したものが、宮殿の壁面に美し

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

くかたどられ彫り刻まれた、聖なる性質を備えたアラビアの書による銘刻句にほかならない。句が書きこまれることで、建物には美だけでなく、心も吹きこまれたのである。

注

本論で記すアラビア語の転写表記は米国国会図書館の方式を用いている。掲載写真はすべて平成一五年八月に筆者自身が撮影したものである。

(1) Frederick Bargebuhr, *The Alhambra, A Cycle of Studies on the Eleventh Century in Moorish Spain* (Berlin, Walter de Gruyter & Co., 1968), pp. 112–113. 引用箇所の和訳は筆者による。

(2) アルハンブラ宮殿の文化と建築の関係についてはアラビア語の研究書Nāṣir al-Rabbāṭ, "Quṣūr al-Ḥamrā' fī Gharnāṭah: al-Tārīkh wa al-Usṭūrah wa mā baynahumā" in: *Thaqāfat al-Binā' wa Binā' al-Thaqāfah: Buḥūth wa Maqālāt fī Naqd wa Tārīkh al-'Imārah 1975–2000* (Beirut, Riyāḍ al-Rayys li-l-Kutub wa al-Nashr, 2002), pp. 253–260.

(3) アルハンブラ宮殿の銘刻句の研究にEmilio García Gómez, *Poemas árabes en los muros y fuentes de la Alhambra* (Madrid, Instituto Egipcio de Estudios Islámicos en Madrid, 1985) がある。

(4) Oleg Grabar, *The Alhambra* (Cambridge, MA, Harvard University Press, 1978), p. 101. Antonio Fernández-Puertas, *The Alhambra I, From The Ninth Century to Yūsuf I (1354)*, 2 vols. (London, Saqi Books, 1997), vol. 1, p. 107. グラバは唯一類似のものは一二世紀にガズニに建てられたガズナ朝宮殿の銘刻詩句であろうと述べている。

(5) 一つのカシーダの長さはおよそ一五から八〇対句で、複数の主題を有する。カシーダについてはRoger Allen, chapter 4 "Poetry," *The Arabic Literary Heritage: The Development of Its Genres and Criticism* (Cambridge, U.K., Cambridge University Press, 1998); Akiko Motoyoshi Sumi, *Description in Classical Arabic Poetry: Waṣf, Ekphrasis, and Interarts Theory* (Leiden, Brill, 2004), p. 1 参照。

(6) スペインにおけるカシーダ文学については、James T. Monroe, *Hispano-Arabic Poetry: A Student Anthology* (Berkeley, University California Press, 1974) 参照。

(7) Erica Cruikshank Dodd and Shereen Khairallah, *The Image of the Word: A Study of Quranic Verses in Islamic*

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

Architecture, 2 vols. (Beirut, American University of Beirut, 1981), vol. 1, p. 3. イスラームにおける書の発展の背景には、一般的にイスラームが生物の絵や彫像制作を禁じていることが関与している。

(8) Sheila S. Blair, *Islamic Inscriptions* (New York, New York University Press, 1998), pp. 1–11. 杉田英明「イスラームと芸術」(板垣雄三監修『イスラームの思考回路　講座イスラームの世界4』悠思社、一九九五年)、二七三—二七六頁。アラビア語書道については Kāmil al-Bābā, *Ruḥ al-Khaṭṭ al-'Arabī* (Beirut, Dār al-'Ilm li-l-Malāyīn, Dār Lubnān li-l-Ṭibā'ah wa al-Nashr, 1994); Kāmil Sulaymān al-Jabūrī, *Usūl al-Khaṭṭ al-'Arabī* (Beirut, Dār al-Maktabat al-Hilāl, 2000); Abdelkebir Khatibi and Mohammed Sijelmassi, *The Splendour of Islamic Calligraphy* (1976, London, Thames & Hudson Ltd, 2001); Annemarie Schimmel, *Islamic Calligraphy* (Leiden, E.J.Brill, 1970). 「書」とは一般的にアラビア語ではキターバ kitābah (書、書くこと) あるいはハット khaṭṭ (文字) という単語で表わされる。

(9) この図像的機能の定義はオレッグ・グラバによる。Grabar, pp. 99–103. そのほかの図像的機能を明らかにしている研究は Valérie Gonzalez, "Understanding the Comares Hall in the Light of Phenomenology," *Beauty and Islam: Aesthetics in Islamic Art and Architecture* (London, I.B. Tauris; London, The Institute of Ismaili Studies, 2001), pp. 42–68 など。

(10) フェルナンデス=プエルタスによると、ナスル朝のクーファ書体とナスフ・スルス書体は、その装飾的発展において西方ムスリム世界での頂点に達したという。アルハンブラ宮殿のアラビア語書道については Antonio Fernández-Puertas, "Calligraphy in al-Andalus," in: *The Legacy of Muslim Spain*, ed. by Salma Khadra Jayyusi, Handbook of Oriental Studies (Leiden, Brill, 1992), pp. 663–669; Antonio Fernández-Puertas, *The Alhambra I*, vol. 1, p. 106.

(11) クルアーン句:『コーラン　井筒俊彦著作集7』井筒俊彦訳(中央公論社、一九九二年)、八四六頁。アラビア語テクスト: Jules Goury and Owen Jones, *Plans, Elevations, Sections, and Details of the Alhambra*, 2 vols. (London, 1842–1845), vol. 1, Plate 7. 英語訳: Grabar, p. 142; Gonzalez, p. 49.

(12) Gonzalez, p. 104 参照。グラバによると、この文言に続いて入り口には、クルアーン第九一章「太陽」(一—九節)が現在は不明瞭ではあるが書かれている。この句は宇宙の力を表現する象徴的な句で、間の中が表現するものを予測させるものである。Grabar, p. 142. このクルアーン句の引用は Goury and Jones, vol. 1, Plate 7 でも確かめられている。また、同じコマレスの間の北側の中央アルコーヴのアーチの周りにもスーラ一一三が刻まれている(Grabar, p. 143)。

(13) 『コーラン　井筒俊彦著作集7』井筒俊彦訳、七四二頁。引用句内の括弧書きは井筒によるものである。

(14) Bargebuhr, p. 190; Grabar, p. 142; Gonzalez, p. 49.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

(15) イブン・アル=ハティーブはムハンマド五世の宰相詩人でもあった。彼の正式な名はIbn al-Khaṭīb, Lisān al-Dīn Abū ʻAbdilillāh ibn Saʻīd ibn ʻAlī ibn Aḥmad al-Salmānī.

(16) Gómez, *Poemas*, p. 107. Fernández-Puertas, "Calligraphy in al-Andalus," p. 664.

(17) アラビア語テクスト：Goury and Jones, vol. 1, Plate 7; Gómez, *Poemas*, p. 107. 詩句中の［ ］内は筆者が補足したものである。これ以降の詩句和訳の［ ］表現についても同様のこととする。

(18) Gonzalez, p. 51 参照。

(19) Fernández-Puertas, "Calligraphy in al-Andalus," p. 651.

(20) アラビア語テクスト：Goury and Jones, vol. 1, Plate 7. このなかの最初の二つの文句はクーファ書体、それ以外はナスフ・スルス書体である。

(21) Grabar, p. 100.

(22) 噴水は一二頭の獅子が放射線状に外側を向いて座っており、獅子の肩の上に噴水盤がのせられている。獅子自体は西暦一一世紀に造られ、水盤はもともと獅子のために造られたものではなく一四世紀に制作されたという。一二頭の獅子は一一世紀に建立されたYusuf b. Naghrallahの宮殿にあったものである可能性が高い。Grabar, p. 124; Sheila S. Blair and Jonathan M. Bloom, *The Art and Architecture of Islam 1250-1800* (Yale University Press Pelican History of Art, 1994), p. 126.

(23) 二姉妹の間の真向かいで南側に位置するSala de los Abencerrajes「バヌー・サッラージュの間」にはその二四句の一部が刻まれている

(24) イブン・ザムラクは当時最も優れた詩人の一人であったとされる。彼の正式名はIbn Zamrak, Muḥammad ibn Yūsuf ibn Muḥammad ibn Aḥmad ibn Muḥammad ibn Yūsuf al-Ṣurayḥī.

(25) フェルナンデス=プエルタスは、このカシーダはムハンマド五世の次男の割礼式を祝って朗誦された詩だと述べている。Fernández-Puertas, *The Alhambra I*, vol. 1, p. 107.

(26) 「ディルハム」と次句の「ディーナール」は各々貨幣の単位を指す。

(27) アラビア語テクスト：Gómez, *Poemas*, p. 115-117（スペイン語訳含）。第二四句は第七句と同じものが銘刻されている。これは筆者が二〇〇三年八月にアルハンブラを訪れた際に確認した。ただし、ゴメスは二四句目として「わたしと勝利とのあいだには最も高貴な関係がある。実際、それは同一のものである」という句を挙げている。Gómez, *Poemas*, p. 119. また、グラバはこの第二四句を記さず、第二四句としてゴメスのいう句がもともとあったとしている。Grabar, p. 146.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

(28) この二四句の第三句から第五句までは、一四六句の第六〇、六一、一二三句にあたり、第七句から第二四句は、一四六句のそれぞれ第一〇三、六二、六三、一〇四、一〇五、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、九三、九二、八七、八八、八九、一〇三句にあたる。ただし、二四句の銘刻句は一四六句のテクストと全く同一のものではなく、ところどころ異なる部分が見られる（注(29)参照）。一四六句のアラビア語テクスト：Ibn Zamrak, Ode 105, *Dīwān*, ed., with notes, Muḥammad Tawfīq al-Nayfar (Beirut, Dār al-Gharb al-Islāmī, 1977), pp. 519–126; Ode 40 by Ibn Zamrak, Monroe, *Hispano-Arabic Poetry*, pp. 346–365; "Qaṣīdah Ukhrā fī al-Tahni'ah, wa fīhā Yaṣif Dār al-Malik," in: Aḥmad ibn Muḥammad al-Maqqarī al-Tilimsānī, *Nafḥ al-Ṭīb min Ghuṣn al-Andalus al-Raṭīb—wa Dhikr Wazīrihā Lisān al-Dīn Ibn al-Khaṭīb*, 10 vols., ed. Muḥammad Muḥyī al-Dīn 'Abd al-Ḥamīd (Beirut, Dār al-Kitāb al-'Arabī, 1949), vol. 10, pp. 49–56.

(29) 語句の変更例としては、一四六句のなかの第六〇句の mabnāka（あなたの建物）は銘刻句第三句では mabnāhu（彼［ムハンマド五世］の建物）となっている。一四六句はおそらく儀式などの際にムハンマド五世を目の前にして誦み上げられたので、「あなたの」と直接二人称が用いられているのに対して、銘刻句では、建物の訪問者へ呼び掛けていることから、訪問者からみた「彼の建物」と三人称が使用されていると考えられる。

(30) Akiko Motoyoshi, "Poetry and Portraiture: A Double Portrait in an Arabic Panegyric by Ibn Zamrak," *Journal of Arabic Literature* 30 no. 3, 1999, pp. 215–219. この論文は加筆されて Sumi, "Poetry and Portraiture: A Double Portrait in a Panegyric by Ibn Zamrak," in: *Description in Classical Arabic Poetry* として発表されている。この他に獅子宮がイスラームの天国であると主張しているのは Gonzalez, 2001, p. 46 など。

(31) グラバは中庭の柱にかかるアーチではなく二姉妹の間の天井クーポラが天球で自転しているかのようであると詩句が言っていると解釈しているが、銘刻句第一五句の天球と見間違えられるかのような事物は、第一四句で登場する柱のアーチをさすと見る方が適切であると考える。Grabar, p. 147.

(32) 四句はイブン・ザムラクによる一四六句のそれぞれ第七五句、第七六句、第一四三句、第一四六句にあたる。この一四六句についての研究に Gómez, *Ibn Zamrak*; Sumi, "Poetry and Portraiture," in: *Description*, pp. 155–193 がある。この噴水に刻まれた詩に関する研究には Gómez, *Poemas* がある。

(33) アラビア語テクスト：Gómez, *Poemas*, pp. 115–117（スペイン語訳含）、英語訳：Grabar, p. 125.

(34) 『コーラン　井筒俊彦著作集7』井筒俊彦訳、第九八章七節（八二九頁）、第七六章一八節（七七六頁）など。

(35) 『コーラン　井筒俊彦著作集7』井筒俊彦訳、七三八頁。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

＊本論は平成一五年一〇月二六日に金沢大学で行われた日本オリエント学会第四五回大会における研究報告「アルハンブラ宮殿に刻まれたアラブ称賛詩句――詩と建築の関係」に加筆したものである。本研究は平成一五年度京都ノートルダム女子大学研究プロジェクト助成金による。

NII-Electronic Library Service